

論文審査の結果の要旨

論文提出者 竹村 和朗

論文題目「現代エジプトの沙漠開発の民族誌：ブハイラ県バドル郡地域の歴史・法・社会関係の研究」

本論文は、現代エジプトにおける沙漠開発について、ナイル・デルタ西部の周縁に位置するブハイラ県バドル郡を事例にして、同地の元開拓地社会に暮らす人々の経験や言動を考察することを通じて、彼らが生きる世界を再構成することを試みた研究である。この研究は、長期に亘るフィールドワークにもとづくものであるが、調査を通じて浮かび上がったのは、(1) 沙漠開発事業の「歴史」の評価、(2) 沙漠開拓地の所有に関わる「法」と人々の対応、(3) 地域社会で生きる人々が形成する「社会関係」の三つのテーマであった。これら三つの主題に関して、本論文は、以下の三部全6章を通じて考察を加えた。

第Ⅰ部「開拓事業の評価と歴史認識」では、まず第1章「政治の声：バドル郡の『歴史書』から」において、行政組織が刊行した冊子を事例に取り上げる。筆者は同書と出会った経緯から論じて、1960年代以来の沙漠開発政策の変遷を踏まえながら、開発の発展段階を議論し、開発の主体である行政側による「歴史物語」という同資料の位置付けを示す。続く第2章「個人の声：住民Gの語りから」では、元沙漠開拓地域に生きる人々の「記憶」の一例として、アパートの大家のG氏のライフヒストリーと市内のモスクの建設に関わる昔話の語りを事例に分析を行う。この語りを通じて、第1章の公的資料では明らかにされることのない社会の諸相、とくに開発のプロセスを利用した一部有力者層の形成や政治的イデオロギをめぐめる確執などといった地域社会の編成の風景を描きだすことに成功している。

第Ⅱ部「国家的法制度の展開と対応」では、沙漠開発における国家的所有から私的土地所有権が生成する過程をめぐり、国家法の展開とこれに対する人々の土地取得をめぐめる問題が論じられている。第3章「沙漠地の法：民法第874条を中心に」では、まず近代以前のイスラーム法による「死地蘇生」規定から論じ始め、同規定が近代民法の中に「選択的」に組み入れる形で沙漠地の所有権が定義されていく過程を論ずる。続けて、革命後の政策変更や行政組織の発展、そして沙漠開拓の展開に対応して法制度が発展・整備された結果、沙漠地の「国有地」化が完成する過程が描かれる。次の第4章「売買契約書：国有地を私有する仕組み」では、こうした「国有地」である沙漠開拓地を私有する仕組みが売買契約書を事例に分析される。具体的には、当初の「許可のない占有」から、人々の要求に対応する形で1970年代に新たに考案された「タムリーク」という手続きを通じて私有が明確化される過程が描かれる。それは国家法の社会へ浸透の一つの重要な事例であった。

第Ⅲ部「人々が実際に依拠する社会関係」では、沙漠開拓を通じて形成された社会の中で社会関係がどのように構築されるのかという問題について、親族関係や同郷のつながりを超えた関係が経済活動と婚姻を通じて形成される事例を分析する。第5章「苗農場で働く：沙漠開拓地における農業の一実践」では、沙漠開拓地における農業の特徴が論じられた後、同じ開拓地移住の第二世代が経営する苗農場をめぐって異なった事例が分析される。

その場合の経営方針の相違は、たんに移住者の個人的背景や社会環境の違いではなく、大きな経済変動の流れの中での生存戦略に由来するという。第6章「喜びを分かちあう：結婚の祝宴と社会的紐帯」では、結婚式の祝宴への参加による参与観察から、沙漠開拓地の社会で新たに形成される社会関係が考察される。「出自」と「婚姻」は従来の社会でも社会関係を形成する重要な要素だが、これらをめぐってはそれぞれの理念が人々の社会関係の実践を規定しているというよりは、状況に合わせた関係性のために理念が選び取られているのではないかというのが筆者の結論である。

本論文は、以上で述べてきたように、現代エジプトの沙漠開拓の歴史を公的語りと個人の語りの中で再構成し、開拓地社会の基盤となる土地所有の問題を国家法の問題から掘り起こして、法をめぐる国家と社会の関係を論じ、また伝統農村社会と対比する形で開拓地農業をめぐる経済関係や親族・地縁関係を越えた社会関係の形成について論じてきた。沙漠開発という事例を通じて、開発と社会、国家と社会の関係を論ずるだけではなく、「民族誌を書く」という問題意識にもとづき、従来の社会人類学的な言説にも問題提起を行った点も注記される。

審査委員会では、たんに民族誌的な叙述にとどまらず、歴史学や法学など学際的なアプローチが取られている点を評価したい、本専攻が目指す「地域文化研究」としての作品に見事に仕上がっているなどの評価の声があった。とくに沙漠の土地法をめぐる、本格的な法研究への取り組み、フィールドワークの成果と文字資料の分析を同時に組み合わせて行った点についても高い評価があった。また、研究対象としては、従来の研究ではあまり試みられてこなかった「ベドウィンのいない沙漠地域研究」という点で新たな研究発展を示すことができたという指摘もあった。

その一方で、いくつかの問題点も指摘された。タイトルにある「民族誌」を書く行為をめぐる対象となる「民族」の問題など方法論的な再検討が必要である、「声」ではなく「視点」の重要性を指摘するというならば方法論的な退行となりはしないか、人々の声の聞き取り方として複数の声から歴史を再構成する手法にさらに工夫ができないか、統計資料の有効活用や社会関係の情報を地図化する手法、対象とする地域とアメリカとの関係など政治史的な背景の叙述の必要性、移住元社会との関係についての分析、モスクの由来やキリスト教徒社会など隠された歴史情報への関心の必要性など、人類学の方法論的問題から地域研究における具体的な論点にいたる、さまざまな問題点が審査委員から指摘された。また、論文の構成をめぐるのは、三部構成のうち第Ⅲ部が前の二つの部の章の組み合わせと対応しておらず、とくに第6章の内容に物足りない部分がある、という意見も出された。

以上に指摘された問題点に対し、論文提出者はいずれも誠実にまたおおむね十分な内容をもって回答した。審査委員との議論は、本論文の内容のいっそうの理解を進め、また今後の研究の進展に示唆を与える内容となった。

本論文は、上記のようにいくつかの修正あるいは改善すべき点を抱えているが、沙漠開発を事例にエジプトの開発・国家・社会をめぐる問題領域に取り組んだ学際的な地域文化研究として優れた内容を持ち、その学術的貢献度は高い。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。